

〈翻 訳〉

『第一回先秦學術國際研討會論文集』（中華民國八十一年（一九九二年四月））

『莊子』「内篇」複音節語の構造

加 丁 竺
藤 秀 家
阿
幸 山 寧
訳 著

目次

- 一、『莊子』「内篇」語彙研究の意義
- 二、単語と連語の弁別基準
- 三、複音節の衍声語
 - a、連綿語
 - b、派生語
 - c、重言語
- 四、合義複合詞
 - a、並列式
 - b、偏正式
- 五、『莊子』「内篇」の語彙の特色

- a、派生語が少ないこと
 - b、並列式・偏正式が優位を占めていること
 - c、偏正式は、同じ語が異なる篇中にしばしば表われるが、並列式はそれと異なる
 - d、語の品詞の傾向
 - e、語彙の安定性
 - f、莊子は数詞と「大」の字を修飾成分にした語を好んで用いた
- 六、哲学用語の語彙構造に関するいくつかの問題
- 七、『莊子』「内篇」中の疑問詞
- a、庸詎
 - b、惡得・惡乎
 - c、而況
 - d、庶幾
 - e、奈何
- 八、結語
- 注

一、『莊子』「内篇」語彙研究の意義

言語の研究は、一般に、三つの領域に分けられる。音韻・語彙・文法がそれである。中国語に関して言えば、音韻と文法の分野では、数多くの研究者の努力によって、既に優れた研究が行なわれ、専著においても、また、論文においても、質量ともに目ざましい成果を生んできた。だが、語彙研究に関して言えば、現在まだ初步的段階を出ていない。大陸では、語彙研究に関する論文は徐々に増加し、研究気風もそれに従って広がっているものの、専著はまだ概

論的なものであり、科学的系統性を持つ語彙学を築き上げたものは、まだ一冊も出されていない。その一方で、台湾の学会がすでに語彙学的重要性を認識し、ここ数年、東海大学・淡江大学・中正大学・高雄師範大学が、陸統とその専門課程を開設し、近い将来、恐らく更に多くの大学がその専門課程を設けることになるであろうことは、注目に値することである。

中国語語彙の全貌と変遷を知るためには、まず、時代の異なる代表的な著作を、一つずつ考察し、異なった角度からの分析と比較を行なわなければならない。「諸子」は、先秦の中国語の語彙を包含する重要な淵源的資料であるから、「諸子」の語彙を考察して行くことは、中国語彙研究の基礎的作業の一つになるだろう。⁽¹⁾

『莊子』という書は、「内篇」・「外篇」・「雜篇」の三つの部分に分かれている。大多数の研究者は、『莊子』という書は、莊子一人の思想が書き綴られたものではなく、実際には、莊子から淮南王（漢の高祖の孫、劉安——訳著注）の時代までの道家思想を含んだものである、と考えている。例えば、『經典釋文』『序録』では、郭象の以下の語を引いている。

一曲之才、妄竄奇説、若闕奕・意脩之首、危言・遊鳧・子胥之篇、凡諸巧雜、十分之^{ママ}（「有」の誤り——訳者）三。

一曲の才にして、妄りに奇説を竄するは、「闕奕」・「意脩」の首の若し。「危言」・「遊鳧」・「子胥」の篇は、凡て諸巧雜、十分に三有り。

郭象は、『莊子』中には、後人が書き加えた篇がある、と考えているのである。羅勉道の道藏本『南華真經』『逍遙

遊」の注も、

莊子五十二篇、郭象固已辨其巧雜、十分有三。今所存卅三篇、東坡蘇氏又黜讓王・盜跖・說劍・漁父、……然愚尚謂刻意・繕性、亦復膚淺非真。

『莊子』五十二篇、郭象固より已に其の巧雜、十分に三有りと辨ず。今、存する所、三十篇、東坡蘇氏、又、「讓王」「盜跖」・「漁父」を黜く。……然ども、愚、尚ほ謂へらく、「刻意」・「繕性」も亦た復た、膚浅く真に非ず

と言っている。

従って、我々が『莊子』を研究する際には、この書が一人の思想を書き著わしたものでなければ、一つの時代の思想を具現したものでなく、莊子から淮南王の時代までの道家の思想を集大成したものである、と考えなければならない。『莊子』という書が、道家集団の著作であり、その中の言語背景も自ずと異なっている以上、その言語の語彙を研究するには、区分を設けなければならない。そうすれば、時代の異なる現象を同一の俎上に載せて考察したり、また、その結果、その間に恐らく存在する言語の歴史的変遷を錯乱させて、言語の順序を混乱させたりすることはなくなるであろう。

「内篇」の七篇は、以前から、多くの学者が莊子自身によって書かれたもの、と考えてきた。「逍遙遊」から「應帝王」まで、筋道も整然とし、内容も一貫しており、一つの自己完結した哲学体系を持っていて、莊子個人の思想を書き著したものと言えよう。所謂、

七篇之文、分之則篇明一義、合之則首尾相承。

七篇の文、之を分かつてば則ち篇ごとに一義を明らかにし、之を合すれば則ち首尾相承^う。

という考え方は、羅勉道以来、一貫しており、異説は見当たらない。「疑古」の錢玄同や、「辨偽」の顧頡剛であっても、「内篇」が莊子の著作ではない、とは考えなかった。⁽³⁾

一方、「外篇」・「雜篇」の多くは、秦漢時代の著作であると判断される。従って、筆者は、「内篇」を考察の対象とし、その言語資料を分析することにより、戦国時代の莊子の言語が明らかにする複音節語の構造の概略を理解しようと思う。

二、単語と連語の弁別基準

語彙を構成しているものを、「詞素」(語素)・「詞」(単語)・「詞組」(連語)の三つのレベルに分けることができるであろう。語素は、意味を持った、最小の言語単位であり、単語を構成する成分であって、単独で文の中に現れることはできない。単語は文を構成する成分であり、言語の中では自由に用い得る基本単位であって、語彙の核心的レベルである。連語(「仿語」・「短語」とも表記される)は、いくつかの単語が構成する、比較的大きな言語単位であり、その構成は、単語に比べてゆるやかである。

現代中国語では、単語と連語の区別は、それ程困難ではないが、古典中国語は限られた材料しかないので、複音節語と連語の境界は余り明瞭とは言えない。周法高氏は、『詩経』の語彙を研究して、五つの弁別基準を挙げた。⁽⁴⁾即ち、

1、現れる頻度から判断する

周氏は以下のように言う。

複合語と連語の境界に関しては、明瞭な区分を施しにくい場合がある。ただし、一般的には、複合語の構成単位間の結合力は相対的に強く、連語のそれは、弱いと言えよう。従って、複合語の出現頻度は、一般的に連語よりも多い。例えば、『孟子』中に「天下」という語は百七十三度、「天子」は三十五度、「君子」は三十五度、現れるのである。

その理由は、複合語の語素が強く結びついていることにある。そのために、二つの語素がいつも相い伴って現れるのである。連語の場合は、それとは異なり、構成単位はただ偶然に結合しただけであるから、相い伴って出現する頻度は自ずと低くなる。

2、「弁別字」によって判断する。

周氏は以下のように言う。

連語はしばしば、記号によって、表示し得る。例えば、「形容詞＋語幹」と表示できる連語は、二字間の「之」の字を加え得る。同格の二字から成る名詞の間には、「與」や「及」などの字を加えることができる。また、同格の二字から成る述語の間には、「而」や「且」などの字を加えうる。しかし、複合語については、このことがあてはまらない。

これは、二字の間に、「弁別字」を入れて調べる方法である。例えば、「夫子」は「夫之子」や、「夫與子」と書き替えることはできないし、「君子」や「公子」を「君之子」や「公之子」と書き替えることもできない。よって、それらの語は、連語ではなく、複合語なのである。実際、これこそが、所謂「拡張法」なのである。陸志章の『漢語的構詞法』^⑤は、この方法を用いて複合語と連語を区別しているのである。

3、切り離して用いるか否かで判断する

この種の方法は、前後の文を検討し、構成要素が切り離せるものか否か、を調べるものである。それが切り離せるものならば、連語ということになる。例えば、「王亦曰仁義而已矣（王も亦た曰く、仁義なるのみ）」の「仁義」は、前後の文の中に、「未有仁而遺其親者也、未有義而後其君者也（まだ仁にして其の親を遺^すつる者有らざるなり、未だ義にして其の君を後にする者有らざるなり）」の文があり、「仁義」という語が、二つの単語の結合によって出来た連語であることが知られる。更に、「好貨財、私妻子（貨財を好み、妻子を私^{わたくし}す）」の「妻子」は、前後の文に、「出妻屏子、終身不養焉（妻を出だして、子を屏し、身を終ふるまで養はず）」の文があって、「妻子」という語も同じく複合語ではなく、連語であることが知られるのである。

4、意味から判断する

例えば、『詩経』の中の「黄鳥」（十四例現れる）は、「黄鸝」のことであって、「黄色い鳥」のことではない。複合語の意は、通例、連語よりも若干特殊化している。「皮冠」はそれが単に「皮で作った帽子」という意味であるのなら、連語ということになり、「狩獵の時に用いる一種の皮の帽子」という意味にとれば、複合語ということになる。「革車」は、「皮で覆われた車」と解せば、連語であるが、「戦争用の兵車」と解するなら、複合語である。

5、語法から判断する。

これは、文の文法構造から判断する方法である。例えば、『孟子』「萬章・下」に、

孔子先簿正祭器、不以四方之食供簿正。

朱注：「徐氏曰、先以簿書正其祭器」

孔子は先ず祭器を簿正し、四方の食を以って簿正に供せず。

朱注「徐氏曰く、先ず簿書を以て、其の祭器を正す」

この文の始めの「簿正」は、「簿」が「正祭器」を修飾しているのに対し、後の「簿正」は、明らかに、複合語としての用法である。

周氏が提示したこれらの五つの基準は、どれか一つを取って見れば不十分な点があるかも知れないが、五つを総合してみた場合、単語と連語の境界を見出すことは難しくない。本稿で『莊子』「内篇」の語彙を分析する際には、これらの基準を参考にした。以下、連語については、ここでは除外し、単に複音節に関して検討する。

三、複音節の衍声語

古典中国語においても、現代中国語においても、語彙構造の類型は、「衍声」と「合義」の二種類以外にない。前者は、音声の響きを中心とするもので、字を音声記号ととらえ、字に本来備わった意味とは無関係である。一方、後者は、意味の働きを中心とするもので、複合語の二つの構成単位（語彙）は、どちらも意味を持っている。本節では、

まず『莊子』「内篇」の衍声語について論ずる。この衍声語は、①連綿語、②派生語、③重言語（疊音語）の三つに分けられる。以下、この順に従って議論を進める。

a、連綿語

『莊子』「内篇」の連綿語は、更に(ア)双声、(イ)疊韻、(ウ)非双声疊韻の三つに分けられる。

(ア)双声

- (1) 踊躍（大宗師）
深く遠いこと。あるいは、軽く浮いたさま。
- (2) 莽眇（應帝王）
勝手気まま。あるいは、得意、の意。動詞として用いる。
- (3) 容与（人間世）
さえぎり止める、の意。古注では「天は折なり。闕は止なり」と二字に分けて解釈するのは、不適當だろう。
- (4) 天闕（逍遙遊）
この語は、「旁薄」にも、「旁魄」にも作る。例えば、『淮南子』「俶真訓」では「旁薄為一」と言い、『文選』「陸士衡挽歌詩」では「旁薄立四極」と言い、『荀子』「性惡」では「難能旁魄而無用」と言い、『文選』「左思吳都賦」では「旁魄而論都」とする。
- (5) 磅礴（逍遙遊）
盧文弨は、これを双声の擬音語とし、綿を打つ音を表す、と考える。旧説では、「泝は浮なり。泝は漂なり」と二字に分けて解釈するが、適當ではあるまい。
- (6) 躊躇（養生主）
得意なさま。

(4) 疊韻

- (1) 撓挑 (太宗師) 曲折するさま。
- (2) 彷徨 (太宗師・逍遙遊)
- (3) 逍遙 (太宗師・逍遙遊)
- (4) 崑崙 (太宗師) 中央の帝王の名。
- (5) 渾沌 (應帝王) 窮まりないさま。
- (6) 弟靡 (應帝王) 広々としているさま。
- (7) 壙垠 (應帝王)
- (8) 螳螂 (人間世) 昔の良剣の名。
- (9) 鑢錙 (太宗師) 煽動するさま。あるいは、山が高いさま。「崑崙」とも作る。
- (10) 畏佳 (齊物論) とりとめもないこと。「孟」の字は、上古音陽部にある。
- (11) 孟浪 (齊物論) 変化すること。あるいは、極まりないこと。
- (12) 曼衍 (齊物論) 野原。
- (13) 莽蒼 (逍遙遊) 木の名。
- (14) 冥靈 (逍遙遊) 小鳥の名。
- (15) 鷦鷯 (逍遙遊) 軟かいさま。
- (16) 淖約 (逍遙遊) 広々としたさま。平らで浅い、という意。
- (17) 瓠落 (逍遙遊)

(18) 機辟 (逍遙遊)

獸を捕えるために掘った落とし穴。

(19) 疵癘 (逍遙遊)

病氣。

(20) 封戎 (應帝王)

散乱したさま。

(21) 疆梁 (應帝王)

(22) 跼蹐 (大宗師)

軽く速いさま。

(ウ) 非双声疊韻

(1) 委蛇 (應帝王)

従うさま。「委」は微部に属し、「蛇」は、『釈文』では、以支の反であり、上古音支部であ

る、とする。

(2) 滑稽 (齊物論)

乱れる。「滑」は古没の反。

(3) 胡蝶 (齊物論)

(4) 扶搖 (逍遙遊)

下から上にあがってゆく風。暴風は、下から上へ行くのである。

(5) 翱翔 (逍遙遊)

(6) 狸狌 (逍遙遊)

成疏は、「狌」は野猫なり」と言い、『釈文』は、「司馬云ふ、狌は狌なり」と言い、朱

桂曜『莊子内篇證補』は、「狸」は猫なり」と言う。それぞれ二字に分けて解釈しているが、実は、「狸狌」は

連綿語とすべきであって、これは、「蜻蛉」や「胡蝶」、「猩猩」が連綿語であるのと同じことである。

(7) 斥鴳 (逍遙遊)

「尺鴳」にも作る。「鴳」は「鷃」にも作る。字の形が種々あるのは、連綿語の特徴の一つで

ある。小さな雀の名。

(8) 惠蛄 (逍遙遊)

「惠」は、「蟪」にも作る。秋になって鳴く蟬をいう。

(9) 窮髮 (逍遙遊)

地名。旧説では、「髮は毛なり。草木なり。北方の毛無きの地を指す」とする。

(10) 獼狙 (齊物論)

獸の名。猿に似て、犬の頭を持つ。

(11) 曲僂 (大宗師)

背をかがめること。

b、派生語

派生語とは、接頭語(接頭辞)、あるいは接尾語(接尾辞)を持った語のことである。『莊子』「内篇」中、ほぼ確定し得る接頭語は、ただ一つ「有」の字だけである。例えば「有慮」(人間世)、「有虞」(大宗師)——いずれも国名を指す——を挙げられよう。接尾語の出現する頻度は比較的高く、その中でも最もしばしば現れるものは、形容詞の接尾語「然」である。例えば、以下のものが挙げられよう。

喘喘然 (大宗師)

成然 (大宗師)

遽然 (大宗師)

莫然 (大宗師)

芒然 (大宗師)

憤憤然 (大宗師)

蹴然 (大宗師)

(應帝王)

憊然 (大宗師)

煖然 (大宗師)

凄然 (大宗師)

塊然 (應帝王)

自然 (應帝王)

怫然 (徳充符)

廢然 (徳充符)

蹇然 (徳充符)

嗚然	眇然	缺然	果然	俄然	繭然	雖然	恍然	駭然	砉然
(逍遙遊)	(逍遙遊)	(逍遙遊)	(逍遙遊)	(齊物論)	(齊物論)	(人間世)	(養生主)	(養生主)	(養生主)
	數數然	蘧蘧然	栩栩然	竊竊然	釋然		莽然	固然	嚮然
	(逍遙遊)	(齊物論)	(齊物論)	(齊物論)	(齊物論)		(人間世)	(養生主)	(養生主)

その他の接尾語に、「乎」、「而」、「焉」、「若」がある。例えば、「乎」を含む語に、以下のものがある。

邴邴乎	潘乎	厲乎	連乎	綽乎	警乎
(大宗師)	(大宗師)	(大宗師)	(大宗師)	(大宗師)	(德充符)
崔乎	與乎	警乎	悵乎	眇乎	恢恢乎
(大宗師)	(大宗師)	(大宗師)	(大宗師)	(德充符)	(養生主)

「而」を含む語は、

俄而 (大宗師)

然而 (大宗師)

があり、「焉」を含む語に、

少焉 (徳充符)

荅焉 (齊物論)

弊弊焉 (逍遙遊)

がある。「若」を含む語は、「眴若」(徳充符)の一例だけである。

c、重言語 (置音語)

重言語とは、一つの字を二つ重ねた造語形式である。この種の構造は、『詩経』の中に最もよく現れる。⁽⁶⁾ 金文や『易経』の中にも多く見られる。⁽⁷⁾ 『莊子』と同様、戦国時代の散文である。『荀子』にも、数多くの重言語が見られる。⁽⁸⁾ その他の先秦の書籍の中で、全く重言語を含まないものはほとんどない。現代中国語の中でも、やはり一般的にこの種の造語方式を用いており、従って、重言語は、中国語の主たる特徴の一つと言ってよいだろう。

『莊子』「内篇」中の重言語に、以下のものがある。

徐徐 (應帝王) 深深 (大宗師)

于于	(應帝王)	拘拘	(大宗師)
青青	(徳充符)	蒼蒼	(逍遙遊)
肩肩	(徳充符)	世世	(逍遙遊)
役役	(齊物論)	蓼蓼	(齊物論)
調調	(齊物論)	刁刁	(齊物論)
閑閑	(齊物論)	閒閒	(齊物論)
炎炎	(齊物論)	詹詹	(齊物論)
惴惴	(齊物論)	縵縵	(齊物論)

四、合義複合語

合義複合語とは、二つの語素の意味が結合してできた語のことである。以下、a、並列式、b、偏正式の順で論ずる。

a、並列式

並列式とは、二つの語素の働き方が同じで、軽重主従の別がないものをいう。『莊子』「内篇」を細かく検討した結果、この種の構造を持つと思われるものに、以下のものがある。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1. 塵埃 | (逍遙遊) | 2. 樽俎 | (逍遙遊) |
| 3. 驚怖 | (逍遙遊) | 4. 河漢 | (逍遙遊) |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-------|-------|------------------|--------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----------------|--------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|-------------------------|-------|
| 33 | 31 | 29 | 28 | 27 | 25 | 23 | 21 | 19 | 17 | 15 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 7 | 5 |
| 顔色 | 愚菴 | 惴慄 | 机括 | 利害 | 猿猴 | 竅穴 | 斤斧 | 廣莫 | 規矩 | 擁腫 | 粃糠 | 繩墨 | 陶鑄 | 坳堂 | 塵垢 | 鐘鼓 | 肌膚 |
| (大宗師) | (齊物論) | (齊物論) | (齊物論，
ゆはず、の意) | (齊物論) ^① | (齊物論) | (齊物論) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | (逍遙遊)
(人間世) | (逍遙遊，
動詞として用いる。
鑄造する、の意) | (逍遙遊，
凹凸の意) ^⑩ | (逍遙遊)
(齊物論)
(大宗師)
(徳充符) | (逍遙遊) | (逍遙遊) |
| 34 | 32 | 30 | | | 26 | 24 | 22 | 20 | 18 | 16 | 14 | | | | | 8 | 6 |
| 天地 | 黯闇 | 宇宙 | | | 芻豢 | 榮華 | 困苦 | 寢臥 | 網罟 | 捲曲 | 金石 | | | | | 形骸 | 文章 |
| (大宗師，
頻見する) | (齊物論) | (齊物論) | | | (齊物論) | (齊物論) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | (逍遙遊) | | | | | (逍遙遊)
(大宗師)
(徳充符) | (逍遙遊) |

68	棺槨	(人間世)	69	門戸	(人間世)
67	斧斤	(人間世，頻見する)			
65	町畦	(人間世)	66	蚊虻	(人間世)
63	吉祥	(人間世)	64	嬰兒	(人間世)
61	童子	(人間世)	62	曲拳	(人間世)
59	刑戮	(人間世)	60	采色	(人間世)
57	彫琢	(應帝王)	58	中央	(應帝王)
55	疏明	(應帝王)	56	涕泣	(應帝王)
53	義(儀)度(應帝王)		54	矰戈	(應帝王)
51	弟子	(徳充符)	52	經式	(應帝王)
49	桎梏	(徳充符)	50	和豫	(徳充符)
47	耆欲	(大宗師)	48	利澤	(大宗師)
45	曲僂	(大宗師)	46	屈服	(大宗師)
43	聰明	(大宗師)	44	遙蕩	(大宗師)
41	刻彫	(大宗師)	42	肢體	(大宗師)
39	哭泣	(大宗師)	40	轉徙	(大宗師)
37	世俗	(大宗師)	38	江湖	(大宗師)(徳充符)
35	肝膽	(大宗師)	36	耳目	(大宗師)(徳充符)

70. 培擊 (人間世) 71. 拳曲 (人間世)
 72. 棟梁 (人間世) 73. 詬厲 (人間世)
 74. 拱把 (人間世) 75. 巫祝 (人間世)
 76. 支離 (人間世, ばらばらにすること。)
 77. 會撮 (人間世, まげのこと。)
 78. 覆墮 (徳充符) 79. 偃俯 (人間世, 憐み愛すること。)

b、偏正式

偏正式とは、修飾語素が中心語素(主体語素)の上に加わった語である。二つの構成要素の間には、主従の別がある。『莊子』「内篇」の中で、これに当る複合語に、以下のものがある。

1. 天年 (大宗師) (人間世)
 2. 真人 (大宗師) 3. 眾人 (大宗師)
 4. 天機 (大宗師) 5. 四時 (大宗師)
 6. 昧者 (大宗師) 7. 氣母 (大宗師)
 8. 玄宮 (大宗師) 9. 北極 (大宗師)
 10. 列星 (大宗師) 11. 戮民 (大宗師, 罪ある人)
 12. 造物者 (大宗師) 13. 兀者 (徳充符)

48	46	44	42	40	38	36	34	32	30	28	26	24	22	20	18	16	14
偏僻	溢言	諸候	畱人	大輒	大郤	文惠君	列子	神巫	泰氏	鰥鼠	六極	靈府	寡人	賢人	六骸	衆生	流水
(人間世)	(人間世)	(人間世)	(人間世)	(養生主)	(養生主)	(養生主)	(應帝王)	(應帝王)	(應帝王)	(應帝王)	(應帝王)	(德充符)	(德充符, 頻見する)	(德充符)	(德充符)	(德充符)	(德充符)
49	47	45	43	41	39	37	35	33	31	29	27	25	23 四域 (德充符)		21	19	17
文王	巧言	常情	匹夫	暴人	大𪔐	天理	南海、北海	壺子	明王	有虞氏	神丘	鄙人			婦人	明日	勇士
(人間世)	(人間世)	(人間世)	(人間世)	(人間世)	(養生主)	(養生主)	(應帝王)	(應帝王)	(應帝王)	(應帝王)	(應帝王)	(應帝王)			(德充符)	(德充符)	(德充符)

- | | | | | | |
|----|-------|-------|----|---------|-----------------|
| 79 | 庖人 | (逍遙遊) | 80 | 尸祝 | (逍遙遊) |
| 78 | 天子 | (逍遙遊) | | 天子，頻見する | (徳充符)(應帝王)(人間世) |
| 77 | 君子 | (逍遙遊) | | 君子 | (大宗師) |
| 75 | 深林 | (逍遙遊) | 76 | 偃鼠 | (逍遙遊) |
| 73 | 燭火 | (逍遙遊) | 74 | 時雨 | (逍遙遊) |
| 72 | 聖人 | (逍遙遊) | | 聖人，頻見する | (人間世)(應帝王)(大宗師) |
| 71 | 神人 | (逍遙遊) | | 神人 | (人間世) |
| 70 | 至人 | (逍遙遊) | | 至人 | (徳充符)(應帝王)(人間世) |
| 68 | 朝菌 | (逍遙遊) | 69 | 冥海 | (逍遙遊) |
| 66 | 杯水 | (逍遙遊) | 67 | 學鳩 | (逍遙遊) |
| 64 | 生物 | (逍遙遊) | 65 | 正色 | (逍遙遊) |
| 62 | 北冥、南冥 | (逍遙遊) | 63 | 野馬 | (逍遙遊) |
| 60 | 水擊 | (逍遙遊) | 61 | 天池 | (逍遙遊) |
| 58 | 大略 | (大宗師) | 59 | 海運 | (逍遙遊) |
| 56 | 畸人 | (大宗師) | 57 | 小人 | (大宗師) |
| 54 | 往世 | (人間世) | 55 | 道術 | (大宗師) |
| 52 | 武士 | (人間世) | 53 | 來世 | (人間世) |
| 50 | 貴人 | (人間世) | 51 | 富商 | (人間世) |

81. 處子 (逍遙遊)
82. 五穀 (逍遙遊)
83. 四海 (逍遙遊) (齊物論)
84. 萬物 (逍遙遊, 頻見する) (大宗師, 頻見する) (徳充符, 頻見する) (應帝王) (人間世)
85. 自舉 (逍遙遊)
86. 水戦 (逍遙遊)
87. 宋人 (逍遙遊)
88. 越人 (逍遙遊)
89. 匠者 (逍遙遊)
90. 繫牛 (逍遙遊)
91. 槁木 (齊物論)
92. 死灰 (齊物論)
93. 大塊 (齊物論) (大宗師)
94. 萬竅 (齊物論)
95. 眞宰 (齊物論)
96. 眞君 (齊物論)
97. 秋毫 (齊物論)
98. 天府 (齊物論)
99. 黃帝 (齊物論)
100. 萬歳 (齊物論)
101. 物化 (齊物論)
102. 筐牀 (齊物論, 方形のベッド)
103. 吾子 (齊物論, 第二人称)
104. 夫子 (齊物論) (徳充符, 頻見する) (應帝王) (人間世)
105. 人籟、天籟、地籟 (齊物論)
106. 冷風、飄風、厲風 (齊物論)
107. 縵者、密者 (齊物論)
108. 太冲 (應帝王, 太虚のこと)
109. 大通 (大宗師, 大きい道のこと)

110 維斗 (大宗師・北斗星をいう)

111 睥天 (人間世) 112 天倪 (齊物論)

五、『莊子』「内篇」の語彙の特色

以上の分析から、いくつかの特色を指摘できると思う。以下、順に述べてみる。

a、派生語が少ないこと

現代中国語の中には、常用される接頭語がある。例えば、「阿」、「老」、「小」、「第」、「所」、「打」などがそれに当るが、『莊子』「内篇」の中には、いずれも現れない。明確に認定できるものは、ただ一つ、上古代の中国語の中に比較的よく現れる「有」だけであり、これは、名詞性の接頭語として用いられている。『齊物論』の「所畷(鄙)」については、学者の中には、接頭語の「所」を付帯した派生語である、と考える人もいる。

接尾語について言えば、現代中国語の接尾語の「子」、「兒」、「頭」、「巴」、「来」、「們」なども、『莊子』「内篇」には見えない。上古代の中国語の中に頻繁に見られる接尾語、例えば、「然」、「若」、「如」、「爾」、「耳」、「而」、「斯」、「其」、「焉」、「乎」、「諸」、「兮」¹²⁾は、『莊子』「内篇」中、五種が現れるだけである。

接頭語と接尾語が未発達であった理由には、一つにはもちろん、歴史的要因があると考えられるが、他の理由として、方言の影響を挙げられると思われる。『莊子』の中では、形容詞の接尾語「然」を除けば、比較的派生語は少ない。

b、並列式・偏正式が優位を占めていること

合義複合語の中では、『莊子』「内篇」には、並列式と偏正式の二種の構造があるだけで、動目式（現代中国語の「知音」、「將軍」、「結婚」、「進歩」など）、補充式（「提高」、「衝破」、「拡大」、「改良」）、主述式（「月蝕」、「民主」、「地震」、「腸炎」）は、余り見受けられない。このことから、中国語の語彙の発展は、並列式と偏正式から始まり、先秦時代には既に十分に発達した段階にあった、と言えよう。この現象は、同時代の『墨子』にも見られる。『墨子』の中には、合計百八十二個の合義複合語が認められ、連合式（並列式）は百二個、偏正式は五十五個を占める¹³。異なっている点は、『墨子』中の並列式が偏正式よりも遙かに多く、ほぼ二倍である。一方、『莊子』「内篇」の場合、並列式が七十九個、偏正式が百十二個であり、並列式は偏正式の七割を占めているに過ぎない。その理由は、恐らく著者自身が語彙を使用する際の特徴が異なっているためであろうと思われる。

もし、時代を殷商時代にまで遡ったならば、並列式と偏正式の二種類の合義複合語しか見られないだろう。並列式は、その多くが時間詞——即ち十千十二支が組み合わさったもので、名詞や動詞の例は、僅かに一、二を数えるだけである。偏正式の中には、若干の名詞、方位詞、時間詞、数詞が含まれる。

西周時代では、並列式と偏正式以外では、動目式と補充式が若干見うけられる。

。動目式

無疆（『金文』史頌殷）、反目（『易』小畜九三）、罔極（『大雅』民勞）など。

。補充式

右序（『詩經』周頌時邁）、出租（『大雅』烝民）

しかし、『莊子』「内篇」の語彙の中には、このような構造の語は、極めて少ない。

c、偏正式は、同じ語が異なる篇中にしばしば現れるが、並列式はそれと異なる

並列式の七十九個の複合語のうち、異なる篇に重なって現れるのは、四個だけである。一方、十二個の複合語のうち、異なる篇に現れるものは、全部で十個ある。また、並列式では、同一の複合語が同一の篇に、複数回現れるものが三個であるのに対し、偏正式は六個ある。

ここから判断した場合、莊子の言語は、偏正式を使用する割合が比較的高い、と言えるだろう。これは、莊子言語の特徴の一面を示していると言えるよう。

d、語の品詞の傾向

偏正式は、そのほとんどが名詞であるが、並列式には、名詞（塵埃・肌膚）・動詞（驚怖・陶鑄）・形容詞（擁腫・廣莫）という異なる品詞がある。この点には、この二種の構造が持つ機能の差異と特徴が現れていると言えるよう。

連綿語の品詞は、形容詞（莽眇・弟靡）・名詞（螳螂・胡蝶）が主であるが、若干の動詞（踊躍・汧澦）もある。派生語は、接頭語「有」を持つ語を除いては、接尾語を持つ語は、全て形容詞と副詞である。

重言語、「世世」が名詞である以外は、その他は全て、形容詞か副詞である。

e、語彙の安定性

言語構造のいくつかのレベルの中で、音声と語法の安定性は、通例、比較的大きいが、語彙に関して言えば、時間の推移につれて、古いものが廃れ、新しいものが定着するという現象が、絶えず発生し易い。しかし、『莊子』「内篇」のこれらの複合語を見ると、大部分は現在まで続けて用いられ、二千年以上時間を隔てた今日でも、見なれない

印象はない。ここにも中国語語彙の安定性が現れている、と言えよう。

f、莊子は数詞と「大」の字を修飾成分にした語を好んで用いた。

偏正構造を持つ語の中には、「四時」、「四域」、「四海」、「五穀」、「六極」、「六骸」などの語や、「大郤」、「大軋」、「大窾」、「大略」、「大塊」などの語があり、莊子が語を造る際、好んで数詞や「大」の字を修飾成分にしたことが伺える。ここにも莊子の言語の特徴の別の一面が現れている。

六、哲学术語の語彙構造に関するいくつかの問題

『莊子』「内篇」には、いくつかの哲学术語が見られるが、これは、『莊子』にのみ見られるもので、当時のその他の言語資料には見うけられない。その哲学术語の構造状況は、字面^{じづ}だけでは解りにくいので、その語に含まれる意味から判断しなければならない。以下、順に論じてゆく。

1、坐忘（大宗師）

郭慶藩『莊子集釋』所引『釋文』では、「端坐而忘（端坐して忘る）」という。王夫之『莊子解』は、

坐忘、則非但忘物、而先自忘其吾。坐可忘、則坐可驅、安驅以遊于生死。

坐忘とは則ち、但だに物を忘るるに非ずして、先ず自ら其の吾を忘るるなり。生して忘る可くんば則ち、坐して驅す可く、安驅して以て生死に遊ぶ。

という。郭慶藩は、以下のように言う。

坐忘者、何所不忘哉？既忘其迹、又忘其所以迹者、内不覺其一身、外不識有天地、然後曠然與變化為體而無不通也。

「坐忘」とは、何の忘れざる所ぞ。既に其の迹を忘れ、又、其の迹づくる所以ゆゑんを忘るるは、内に其の一身を覺えず、外に天地有るを識らず、然る後に曠然として變化と體と為りて通ぜざる無きなり。

王先謙『莊子集解』所引の司馬注は、「坐而自忘其身（坐して自ら其の身を忘る）」という。以上の解釈から判断すると、「坐」は、「忘」の修飾成分であるから、「坐忘」という語は、偏正構造を持つと考えられる。

2、櫻寧（大宗師）

郭氏『莊子集解』は、以下のようにいう。

櫻、擾動也。寧、寂靜也。夫聖人慈惠、道濟蒼生、妙本無名、随物立稱、動而常寂、雖櫻而寧者也。

「櫻」とは、擾動なり。「寧」とは、寂靜なり。夫れ、聖人の慈惠、道は蒼生を濟ひ、妙として無名に本づき、物に随ひて稱を立て、動やもすれば、常に寂、櫻と雖ども、而れども寧なる者なり。

王先謙『莊子集解』は、以下のように言う。

櫻、迫也。物我生死之見迫於中、將迎成毀之機迫於外、而一無所動其心、乃謂之櫻寧。

「櫻」とは、迫なり。物我生死の見、中に迫り、將迎成毀の機、外に迫り、一として其の心を動かす所無く、乃ち之を櫻寧と謂ふ。

以上のことから、「櫻」と「寧」は、互いに関連する二つの概念が並んだものである、と考えられる。よって、この語は、並列構造を持つ、と判断すべきであろう。

4、才全（徳充符）

『莊子』の本文では、以下のように言う。

哀公曰、何謂才全。仲尼曰、死生存亡、窮達貧富、賢當不肖毀譽、飢渴寒暑、是事之變、命之行也；日夜相代乎前、而知不能規乎其始者也。故不足以滑和、不可入於靈府。使之和豫、通而不失於兌。使日夜無部、而與物為春、是接而生時於心者也。是之謂才全。

哀公曰く、「何をか才全しと謂ふ」と。仲尼曰く、「死生存亡、窮達貧富、賢不肖、毀譽、飢渴、寒暑は是れ、事の變にして、命の行はるるなり。日夜、相ひ前に代はりて、知も其の始めを規ること能はざる者なり。故に以て和を滑すに足らず、靈府に入る可からず。之をして和豫にし、通じて兌びを失はず。日夜卻無からしめて、物と春を為す。是れ接して時を心に生ずる者なり。是れを之才全しと謂ふ。」と。

これは、意味上の解釈であるが、もし、字の構成から考えると、黄錦鉉氏の『新釋莊子讀本』の「持って生れた徳性を保全する」という解釈を得るためには、「全才」という動句式でなければならない。ここでは、「才全」に作って

いるから、この語の構造は、主述式であると考えなければならない。「才」は名詞であり、主語である。「全」は述語である。

4、無假（徳充符）

郭慶藩『莊子集釋』は、以下のようにいう。

无假當是无瑕之誤。審乎己之無可瑕疵、斯任物自遷而無役於物也。

「无假」は當に是れ、「无瑕」の誤りなるべし。己の瑕疵す可き無きを審らかにし、斯ち物の自ら遷るに任せ、物に役せらるる無きなり。

『淮南子』『精神篇』では、正に「審乎無瑕」に作っている。「瑕」と「假」は、どちらも「段」の声に従い、互いに誤り易い。『漢書』『鄭世家』では、「使人誘劫鄭大夫甫假」というが、『左伝』では、「傳瑕」に作っている。『礼記』『檀弓』では、「看假」に作るが、『漢書』『古今人表』では、「公肩瑕」に作っているのは、その証左となるだろう。郭氏の解釈に従えば、「無假」は、動目構造を持つ、ということになるだろう。

5、坐馳（人間世）

黄錦鉉氏の『新譯莊子讀本』では、「身はここに坐していながら、心はあちらに追い求めていく」と解釈する。とすれば、「坐」と「馳」は、並列された二つの概念であり、この語は、並列構造を持つと考えるべきである。

6、無厚、有間（養生主）

「厚」と「間」は名詞であるから、この二つの語は、明らかに動目構造を持っている。

7、懸解（養生主）

郭慶藩は、以下のように言う。

以有係者為縣、則無係者縣解也。縣解而性命之情得矣。此養生之要也。

係有る者を以って縣と為せば、則ち係無き者は縣解なり。縣解けて性命の情得たり。此れ養生の要なり。

『釋文』では、

以生為縣、以死為解

生を以て縣と為し、死を以て解と為す。

という。とすれば、この語には、「逆さにつるされたものが解かれる」という意味があり、主述構造を持つ語であると判断されよう。「縣」は名詞であり、主語の役割を果たし、「解」は、述語の役割を持っている。

8、物化（齊物論）

郭慶藩は、以下のように言う。

新新變化、物物遷流、……故知生死往來、物理之變化也。

新新變化し、物物遷流す。(中略) 故に生死の往來・物理の變化を知るなり。

これはつまり、「物の形が変化する」という意味であるから、この語は、主述構造である、と考えるべきであろう。「物」は名詞で主語、「化」は述語である。

9、葆光(齊物論)

郭慶藩は、以下のように言う。

任其自明、故其光不弊也。

其の自ら明るきに任す。故に其の光、弊れざるなり。

『釋文』では、

若有若無謂之葆光

有るが若く、無きが若き、之を「葆光」と謂ふ。

つまり、「光を内に蔵す^{かく}」という意味であるから、動目構造の語であるといえよう。

以上の九個の哲学用語は、語彙構造の面で、莊子が用いた一般的な語彙から抜け出て、主述式と動目式を生み出すに至った。その理由は、莊子がこれらの語彙を創造する際、莊子独自の哲学思想を伝えるために、造語の面でも新機

軸を打ち出したのである。そしてこれらの語は、こういった新しい構造を持つ語の濫觴となったのである。その他の哲学用語について言えば、連語に属するものがいくつかあるが、ここでは論じない。例えば、「心齋」（人間世）という語があるが、これは、『莊子』の本文の中では、まず、

仲尼曰、齋、吾將語若

仲尼曰く、「齋せよ、吾、將に若に語げんとす。

と述べられたあとで、

若此、則可以為齋乎。曰、是祭祀之齋、非心齋也。

「此の如くんば、則ち以て齋を為す可きか」と。曰く、「是れ祭祀の齋なり。心の齋に非ざるなり」と。

と述べられている。従って、「心」と「齋」の結びつきが緩やかであることは明らかであろう。「心齋」は、二つの語が組み合わさって出来たものである。

七、『莊子』「内篇」中の疑問詞

a、「庸詎」

『莊子』「内篇」の正文中、以下のものが「庸詎」を用いた例である。

。齋物論

庸詎知吾所謂知之非不知邪？ 庸詎知吾所謂不知之非知邪？

庸詎くんぞ吾謂ふ所の知の、不知に非ざるを知らんや。庸詎くんぞ吾謂ふ所の不知の、知に非ざるを知らんや。

。人間世

外合而内不訾、其庸詎可乎？

外合うも、内は訾^{はか}られず、其れ庸詎くんぞ可ならんや。

。大宗師

庸詎知吾所謂天之非人乎？

庸詎くんぞ知らんや、吾謂ふ所の天の人に非ざるか。

庸詎知所謂吾之乎？

庸詎くんぞ知らん、所謂^{いはゆ}る之を吾とするなるを。

庸詎知夫造物者之不息我黥而捕我劓、使我乘成以随先生邪？

庸詎くんぞ夫の造物者の、我が黥を息めて、我が劓を補ひ、我をして成を乗せて、以て先生に随はしめざるを

知らんや。

以上の例から、「庸詎」は莊子がしばしば用いた複音節の疑問詞であることが分るだろう。この「庸詎」という語は、莊子以前、及び莊子と同時代の作品には見られないことから、莊子の用いた言語に特有な語彙であると言えよう。『楚辞』「嚴忌哀時命」には、「庸詎知其吉凶？（庸詎くんぞ其の吉凶を知らんや）」という用例があるが、嚴忌は漢代の人物であるから、この用例は、莊子の後のものに属する。漢代の『淮南子』と『新序』の中では、「庸遽」に作っている。『経伝釈詞』三では、「庸」は「詎」と同義」と言い、劉淇『助字辨略』は、「庸」は「豈」なり、「寧」なり、「安」なり、「何」なり」と言う。『釈文』は、「齋物論」につけた注の中で、「詎」は、「何」なり」と言う。『広雅』は、「庸」は、「何」とほぼ同義」と言っている。以上の解釈から判断した場合、「庸詎」は二つの疑問語が並列構造を持った複合疑問詞であり、反論・詰問する時に用いられ、「怎麼（どうして）、「難道（まさか）」という現代中国語に相当するもの、と考えるべきであろう。従って、「庸詎」は並列式と考えられる。

b、惡得・惡乎

。德充符

惡得不謂之人？ 惠子曰、既謂之人、惡得無情？

「惡くんぞ之を人と謂はざるを得んや。」 惠子曰く、「既に之を人と謂ふ。惡くんぞ情無きを得んや。」

。齊物論

予悪乎知説生之非惑邪？ 予悪乎知惡死之非弱喪、而不知歸者邪？

予^{われ}悪くんぞ生を説ぶことの惑ひに非ざるを知らんや。予悪くんぞ死を^{にく}惡むことの弱喪して歸るを知らざる者に非ざるを知らんや。

予悪乎知夫死者、不悔其始之蘄生乎？

予悪くんぞ、夫^かの死者も其の始めに生を^{もと}蘄めしを悔いざるを知らんや。

。大宗師

子獨惡乎聞之？

子獨り悪くんぞ之を聞かんや。

。養生主

是何人也？ 惡乎介也？

是れ何人ぞや。悪くんぞ介せられたるや。

この「惡得」・「惡乎」という語は、どちらも「惡」が接尾辞の上に付いた構造を持っており、接尾辞を持つ衍声語を考えるべきである。「惡得」は「怎能（どうして〜できようか）」という意味であり、「惡乎」は、「如何（どのように）」・「為何（何のために）」という意味である。「惡得」は、先秦時代にはすでに普通に用いられていた。例えば、

『孟子』「滕文公・上」・『呂氏春秋』「遇合」・「慎大覽」・『公羊伝』「襄二十九年」は、すべてこの語を用いている。「悪乎」に関しては、『公孫龍子』「堅白論」・『公羊伝』「桓六年」・『礼記』「檀公・上」・『孟子』「公孫丑・上」『孟子』「告子・下」などに見られ、先秦時代に頻繁に用いられた複合疑問詞であることが分る。

e、而況

。大宗師

而況其卓乎？

而も況んや其の卓なるをや。

而況其真乎？

而も況んや其の真なるをや。

「而況」は、つまり「何況（ましてはなおさらだ）」という意味である。しかし、「而」という字は、逆接の機能を持っているのに対し、「何」それ自身が疑問詞であり、「況」も疑問詞である。どちらも、並列構造を持つと考えられる。この「而況」という語は、『孟子』「公孫丑」・『列子』「説符」などにも見られ、上古代に広く用いられた語であることが分る。

d、庶幾

。大宗師

庶幾其果為聖人乎？

庶幾こひねがはくは、其れ果たして聖人為らんか。

。人間世

庶幾其國有瘳乎？

庶幾はくは、其の国瘳有らんか。

この語は比較的古い語で、『易経』「繫詞・下」・『孟子』「梁惠王・下」・『公孫丑・下』・『詩経』「小雅・車輦」・『中庸』などの書物に見られる。「ほとんど」に近いの意味である。非双声疊韻の連綿語である。

e、奈何

。齊物論

吾獨且奈何哉？

吾獨はり且た奈何いかんせんや。

これは動目式の複合疑問詞である。上古代の中国語中に頻出し、『公羊伝』「桓六年」・「莊九年」・「成人年」・「僖二年」・『荀子』「堯問」・『韓非子』「難一」・「外儲説左・上」・『穀梁伝』「僖元年」など見える。

八、結語

言語の特性を研究する一般的な研究者は、「中国語は単音節言語の一つである」ということが普通である。あるいは、言語の変遷を研究する人々の中には、「中国語は単音節語から複音節語へ変わっていく言語である」、と言う人もいる。しかし、上古代の言語資料を具体的に分析したところ、上古代の中国語の中にも、やはり数多くの複音節語が存在していることが知られた。もちろん、後代の、複音節語が相当な勢いで増加したことも否定できない事実であるから、古典中国語は単音節語彙が優位を占める言語であり、現代中国語は、複音節語が優位を占める言語である、と言うべきであろう。

語彙の音節の単・複の変遷以外、複音節語は歴史的にどのような構造上の変化を生み出したのであろうか。これも注目に値する問題である。特に、合義複合語の種々の構造の消長については、これまでほとんど専論が書かれなかった。本稿では、この問題に少しく言及したが、この問題を明らかにするためには、今後、更に全面的で広範な研究を行ない、各時代の言語資料を分析しなければならない。それでこそ中国語言語学の科学的体系のために、根拠のある基礎的な研究を行なって、科学的な中国語語彙史をうちたてることができるのである。

注

- (1) 参照、陳克炯『墨子詞彙譚概』（中南民族学院報。第四十四期 一九九〇年）
- (2) 参照：三民書局『新譯莊子讀本』所引『周秦諸子考』劉汝霖の説。
- (3) 参照：注(2)所掲『新譯莊子讀本』十四頁。
- (4) 参照：『中国古代語法』「構詞編」三百八頁。

- (5) 『陸志韋語言學著作集』第三冊所収。(北京中華書局 一九九〇年)
- (6) 馬真「先複音詞初探」は、『詩經』に迭音語が現れる頻度を調査し、すべての複音語の半数を占めることを明らかにした。
(北京大学學報 一九八一年一期)
- (7) 参照：戴璉璋「殷周構詞法初探」四百九十二頁。(『屈萬里先生七秩榮慶論文集』一九七八年 所収)
- (8) 参照：麥梅翹「荀子的疊音詞」(紀念王力先生九〇誕辰語言學研討會論文 一九九〇年)。麥氏は、『荀子』を調査し、九十個の迭音語がのべ百二十三回現れ、七百九十九個の双音複合語のうち、迭音語が約八分之一を占める、という。
- (9) 注(8)所掲麥氏論文では、迭音語が『左伝』中二十一個、のべ二十七回、『論語』中二十五個、のべ三十回、『孟子』四十三個、のべ六十二回、『莊子』中百七個、のべ百五十八回現れる、という。
- (10) 「坳堂」について、古注では「堂道を坳という」というが、従い難い。朱桂曜『莊子内篇證補』では、「支遁は『坳埵』を『坳堂』と解し、『埵』は『堂』と発音が同じで、意味も近い」という。段玉裁は、『説文』に注して「埵」の意味は、『突』である」という。また「堂」が「殿」と言われる理由は、ほかでもなく、前に階段があり、四辺が高くなっているからである」という。「堂」も「突起」の意味があるのである。支氏は、「坳埵形がある」とは、「凹凸形がある」というのとはほぼ同じである」と言う。
- (11) 「利害」という語は、『齊物論』中に多数現れており、一つの複合詞とみる。その中に「利に就かず、害に違かず」という文が有るけれども、やはり連語とはみない。
- (12) 注(4)所掲『中国古代語法』「構詞編」の「後附語」の一章(二百五十三頁から三百五頁)を参照。
- (13) 参照：注(1)所掲書七十二頁。
- (14) 参照：注(7)所掲書四百九十一頁。
- (15) その他の上古代の言語資料の状況も同じである。金文中、偏正構造は、複合語の四分の三を占め、『詩經』では半分を占めている。注(7)所掲書参照。